

論壇

6%超からマイナスに

大学1年生に経済学の基礎を教える時に、最も重要な項目として取り上げるのが金利(利率)だ。金利のことが分かれば、経済の構造もより良く見えてくる。預金への金利や住宅ローンの金利など、金利については私たちの日々の生活でなじみのあるものではあるが、それでも案外と説明が難しいものだ。

その金利の代表的な指標としてよく取り上げられるのが、10年物の国債の利回りだ。長期金利とも呼ばれる。多くの金利はこの長期金利と連動して動く。この動きを見ていけば経済のさまざまな金利の動きも分かる。

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

超低金利と経済の長期停滞

さて、その長期金利であるが平成のはじめには6%を超える水準であった。それが現在は0%を下回るマイナスの水準である。この30年間の間に随分と金利が下がったものだ。学生に住宅ローンの話をすると、私が若い頃に銀行から借りたローンの金利が7%を超えるような水準であったという話をすると、驚く人が多い。現在であれば、10年固定の金利でも1%前後で借りることができるようだ。

住宅ローン金利が7%の時代と1%の時代の違いは大きい。かりに3千万円借りれば、7%なら月々の利子だけで17万5千円になる。1%なら月々の利子は2万5千円になる。元金の返済があるのと、利子だけで比較はできない面もあるが、大きな違いがあるのは明らかだ。

私のような世代の人間にとっ て、住宅ローンを借りると、一生懸命に毎月の支払いをしても、その多くが利払いに回って、元金はなかなか減っていかなかった。当時はローン地獄という言葉もあったが、住宅を購入するために重い住宅を購入しやすくなれば、もう少し広い家をという欲が出てくる。あるいは高い金利なら住宅購入を諦めていたであろう人も、低い金利なら買えるという希望が出てくる。

結果として、社会全体として住宅に対する需要が増えてくる。これが住宅価格を引き上げる結果となる。金利が低い状態が続くと、不動産価格や株価が高くなって、それがバブルになる危険もあるというのだ。マスコミなどで経済の過熱ということが言われるが、それは景気が過熱するというよりも、不動産価格や株価などが高くなりすぎるとのことへの懸念である。

不動産や株価高騰懸念

さて、日本の金利は今後どうなるのだろうか。将来の動きを予想することは難しいが、金利は当分は上がらないと予想する人が多い。この30年ほど、金利はずっと下がり続けている。それだけ経済の基調が弱いということだ。日本銀行は一生懸命に刺激的な政策をとっている。それでも経済が本格的に回復しないので、金利の低い状況が続く。

少子高齢化の中で、成長率がなかなか上がらないのは仕方ない面がある。それを反映して金利が低いことも理解できる。問題はそうした超低金利の状態が株価や不動産価格を異常に引き上げているかもしれない。日本ではまだそうした状態にはなっていないという見方もある。しかし、世界的にはそうした懸念が出ており、それが最近の国際金融情勢を見る上での重要なポイントとなっている。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。